徳島新聞　平成27年1月30日

時評とくしま

山崎　勝之
鳴門教育大学院教授

真っ向勝負の論争を

「健康への道」の混迷

健康への関心は高まるばかりだ。裏を返せばこの現況は、健康問題にさいなまれている人の多さを物語っている。

本県でも糖尿病死亡率の連続全国一は言わずもがなの不名誉であるが、そればかりではない。厚生労働省の人口動態統計（2013年）では、がん、心疾患、肺炎、脳血管疾患は死因ワースト4になるが、本県では、この4大疾病の死亡率がいずれも全国平均を大幅に上回っている。

そこで健康関連情報を探ってみると、いやはや、世に常識となる知見にも対立極まる意見がめじろ押しだ。その意見の多くは医学の専門家から出ているだけに、一般世人には、どう動けばよいのか疑問の連続となる。意見は多方面でぶつかり合っているが、一例を挙げてみよう。

「がん論争」はどうだ。元放射線治療医の近藤誠氏は、がんには本物と「もどき」があり、もどきのがんは放置しても転移せず、本物のがんは早期発見しても転移は免れないと言う。物議を醸した「患者よ、がんと闘うな」の出版は20年ほど前で、それ以降主張は一貫し、最近菊池寛賞を受けてからはその迫力は増すばかり。慶応大病院を定年退職時に設けたセカンド・オピニオン外来の活動にも拍車がかかる。

氏のすごさは、欧米の一流の研究データを突きつけ論を進めるところで、科学性たっぷりの論陣を張る。かつては直接論争を挑んだ医学者もいたようだが、今では市井の書籍などで、実情と乖離するか、科学的根拠（エビデンス）とは何かも知らぬ批判に出くわすばかり。

近藤氏は、がん検診や早期発見を否定し、手術や抗がん剤も疑問視する。しかし日本の医療は微動だにせず、検診を続け、標準治療に邁進する。今や氏の見解は一笑に付せない影響力がある以上、ジャブめいたバッシングではなく、本家筋の医学者も真っ向から論争を挑んではどうか。

近藤氏の見解にも疑問符は付く。自ら科学上のデータを出さず、それを出す困難さだけを強調する。もどきと本物のがんの違いを病理学的に明晰にすることもできない。詰まるところ、近藤論もその否定論も決め手を欠き、患者は治療難民と化す。上質のエビデンスを交えた論争で決着を見たいが、両者の長所の融合こそが真実となる可能性がある。

このがん論争は一例にすぎない。機会があれば紹介したいが、他にも、朝食はとるな、牛乳は飲むな、アトピーにステロイドは無用、健康診断否定論も驚愕ものだ。そう言えば、アメリカでは強制に近い健康診断など職場にはない。「健診を受けると、がんが早期発見されてしまう」―この妙な警鐘も冷徹に真偽を見極める時が来ている。

※本ファイルの著作権は徳島新聞社に帰属します。記事・本文・画像の、無断転載は固くお断りいたします。